

子どもどうしの関わりにおける保育者の援助

— 保育者が困難性を感じる場面に着目して —

園川 緑¹ 植草 一世¹ 金子 功一²

Support of the nursery and kindergarten teacher in the relationship between children —Focusing on the scene when the nursery and kindergarten teacher feels difficulty—

SONOKAWA Midori UEKUSA Kazuyo KANEKO Koichi

子どもたちは身近な人と関わりながら、人と関わる力の基礎を培っていく。保育所等での集団生活は様々な子どもどうしの関わりが日常的にある、まさに学びの宝庫である。子どもは他の子どもや保育者と関わりながら、人間関係を学んでいる。やり取りが難しい局面に当たることも日常茶飯事であるが、保育者の援助を受けながら、他の子どもとの関わりを少しずつ身につけている。本研究は、現役の保育者のインタビューから、子どもどうしの関わりにおいて保育者が困難性を感じる場面での保育者の援助的関わりをまとめたものであり、保育者や学生などが子ども同士の関わりを考える上での参考資料とし、保育実践に還元していくことを目指すものである。保育者は子どもに対する多様な援助を行っているが、中でも2歳～5歳の年齢幅に関わらず、子どもの気持ちの「代弁」や状況理解を促す「言葉かけ」を行うという基本的な子どものやり取りを中心に据え、繰り返し関わっていた。また事態の好転には子ども自身の成長も影響していると感じながら、なかなか良い結果が得られない場合にも、子どもへの働きかけを積み重ねる保育者の姿があった。

キーワード：子ども、人間関係、援助、保育者

1 はじめに

授業の中で、学生自身が子ども時代を振り返るとき、多様な子どもの姿が浮かび上がる。他の学生との意見交換をしながら、子どもの個性は実に様々であることを改めて感じる学生も少なくない。多様な子どもたちが集団生活をしていく保育所等の現場では、子どもどうしの関係の中で、日常的に様々なことが起こっている。授業の中で、保育園等の現場の映像を見たり、事例について考えたりする時に、よく出てくる感想が「保育者になったら、自分は子どもどうしの喧嘩やトラブルに対応できるのか不安」という内容のものである。先行研究に「幼稚園教諭の困難性や問題点」についてのアンケートで、保育学生と保育者に自由記述を求めた調査がある。その中で、学生がイメージする「困難性」は、目の前に

ある課題に関する「保育技術」に関する内容が多い結果だったが、「けんかの対応」についても複数挙げられていた¹⁾。保育の現場では様々な場面に応じた個々の対応が求められるが、子どもにとってより良い状況を瞬時に判断する必要が求められる。

子どもが育つ地域の中で、人との関係性が希薄化しているといわれる現代社会では、子どもが群れで遊ぶことのできる保育所や幼稚園等の就学前の保育・教育施設の存在意義はますます大きいものとなっている。人間関係を大いに学ぶ場として、保育者の援助的関わりは、大変重要である。「保育者は『最大の環境』」であるとし、保育者と子どもとの関わりについて「子どもの生涯にわたる人と関わる力のスタートを担う専門職」²⁾と述べている論文等もあるが、保育者の子どもとの関わりは、人

1 植草学園短期大学

2 植草学園大学

と関わる力の土台を築き、その後の人生にも影響を及ぼす重要なものである。

2 保育所保育指針等^{3) 4) 5)}における領域「人間関係」

2015年には、全ての子どもたちに質の高い教育・保育を提供することを目標に掲げた子ども・子育て支援制度が施行され、就学前の子どもを対象とした幼保連携型認定こども園も創設された。教育・保育の内容に関する事項において、幼稚園教育要領や保育所保育指針との整合性の確保も議論された^{3) 4) 5)}。利用する園の種別に関わらず、保育者は多様な子どもや家族に関わることもつながり、保育者の専門性の学びの向上が求められている。

保育所保育指針等^{3) 5)}では、乳児保育の「人間関係」の内容取扱いにおいて、「温かく受容的・応答的に関わり、一人一人に応じた適切な援助を行うようにすること」との記述がある。特に乳幼児期は、人との関わりを基礎を培う大変重要な時期であり、そこに関わる保育者の存在がとても重要である。

保育所保育指針等^{3) 5)}の領域「人間関係」の1歳以上3歳未満時の保育の内容には、「保育士等の仲立ちにより、他の子どもとの関わり方を少しずつ身につける」という項目がある。他児との関わりも増えてくる時期には、保育者が子ども同士の関係を調整する場面が多く生じる。

満3歳以上の保育の中では、保育所保育指針等^{3) 4) 5)}においては、共通して「行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること」と記述されている。3歳以上児の保育の内容の「友達との関わりを深め、思いやりをもつ」という内容説明には、「子どもが友達との関わりを深められるように援助するとともに、保育士等が子ども一人一人を大切にし、思いやりのある行動をするモデルになることや他者の感情や相手の視点に気付くような働きかけをすることも重要である」というように、保育者の援助について触れている。どの年齢においても、子ども育ちに保育者の援助的な関わりが重要であることに変わりなく、子どもは集団生活の中で、保育者とのやり取りを通して人との関わりを学んでいる。

ここでは、保育者自身が難しいと感じた子ども同士の関わりへの援助経験についての事例を通して、

保育者の子どもに対する援助的関わりの内容を捉えることを試みた。

3 目的

この研究は、子どもどうしの関わりにおける保育者の援助的関わりの内容を捉えることを目的とする。また、研究結果が子ども同士の関わりを考える上での参考資料となり、保育実践に還元することを目指すものである。

4 研究方法

1) 方法

本研究は、探索的な仮説生成型の研究とする。データに基づき、保育者の援助的関わりの内容を捉えるため、現職の保育者にあらかじめ用意したインタビュー項目について、半構造化インタビューをした。対面でのインタビューが難しい場合には、Zoomを利用した。インタビュー内容は録音し、逐語録にした。1人20分から60分の時間を要し、3日間の中で7人のインタビューを行った。

保育者の語りの事例の中で、内容についての複数の類似例が見られたものを取り上げ、カテゴリー生成した。それと同時に、浮かび上がる内容を客観的に捉えるために、テキストマイニングの解析ソフトの一つであるKH Coder (Ver 3) による分析をした。KH Coderによる分析は全体を要約して提示することができることから、カテゴリー生成された類似例と合わせ、考察した。

2) 研究協力者

保育園・幼稚園等の勤務経験がある保育者に依頼した。子どもどうしの関わりについて、難しいと感じた事例について、語ってもらった。研究協力は、知り合いの保育者に直接依頼した。

研究協力者は7名、20代～30代のすべて女性である。保育の経験年数は5年～9年であり、7名すべての研究協力者が保育園または幼稚園の勤務経験者である。

3) インタビュー項目

①子どもどうしの人間関係に悩んだり、考え込んだり、その援助について迷ったりしたことがあったか。

- ②その時にどのように子どもと関わったか。
- ③その対応で、子どもたちの人間関係に改善が見られたか。
- ④人間関係の改善に良い影響があったと思われることは、何かあるか。

また、子どもどうしの人間関係について、印象に残っている事例について、これら4項目を含め、自由に語ってもらった。

4) 期間

インタビューは、2021年5月～11月の期間で、研究協力者と日程調整をした。インタビューは3日間にわたり実施した。

5 倫理的配慮

「植草学園短期大学研究倫理規程」(平成27年7月8日教授会決定)を遵守し、倫理的に配慮した。また個人情報保護を遵守し、研究協力者・園名・子どもの名前を出さずにやり取りの状況がわかるようにした。

6 結果と考察

(1) 類似例によるカテゴリー生成

保育者7名が語ってくれた20事例の内容について、複数の類似例が見られたものから、4つのカテゴリーが抽出された。

結果に挙げた事例は、保育者が子どもどうしの関わりの中で、何を考え、どのように関わっていったかというプロセスの中で類似例が複数あった事例を取り上げ、示した。類似例の挙げ方については、M-GTAの手法を参照した⁶⁾。

1) 子どもの気持ちの代弁

カテゴリー	子どもの気持ちの代弁をして、他の子どもにも伝える。
語りの事例 (類似例)	<ul style="list-style-type: none"> ・「本当は嫌いとかそういうのではなくて、〇〇ちゃんと遊びたくなくて、そういうのをやってみただよ」ってお話して…嫌なことだったみたいだよ。」ってお互いと言って、「隣でもいい」ってなって… (3歳) ・「壊すのも遊びだよ」ってして、「でも友達を作ってるのは壊したら嫌だよ」って…でも壊したくて、それは変わらない (5歳)

<ul style="list-style-type: none"> ・輪に入りたいけど、〇〇ちゃんと遊ばないって…「でも『遊びたくないよ』って言われるのは悲しいよね」って話して… (3歳) ・おもちゃのトラブルの時に口が出ちゃったりして…「痛いよね」は伝えたんですけど、言葉が伝わらなくてお口が出ちゃって… (2歳) ・「やだったよ」って言えるようになってきたら、落ち着いた。(2歳) ・1歳の先生は「さっきまで使ってたもんねー」って言ってくれる。(1歳)

保育者は、子どもの気持ちを言葉にして子どもに伝えていく「代弁」を多く行い、他の子どもとの気持ちの調整を図っていた。代弁は、年齢に関わりなく広く行われていた。代弁により、子どもの気持ちに変化する場合とそうでない場合が語られたが、保育者は、言葉が未発達である1～2歳の子どもに対しても繰り返し相手の気持ちを伝えていた。年齢に関わらず、それぞれの子どもの気持ちを伝えようと、子どもの気持ちを代弁していた。「子どもをつなぐ・仲間を意識させる」働きかけの具体的内容として、「子どもの気持ちの代弁」を挙げている論文⁷⁾もあり、「代弁」は保育の中の多くの場面で実践されている。相手にも気持ちがあるということを伝えたいという保育者の思いがあり、このやり取りにより、多くの場合、子どもの他児の立場に対する理解が少しずつ進むと考えられる。

2) 関係調整する保育者の直接的な介入

カテゴリー	全員が遊べるように保育者が介入する。
語りの事例 (類似例)	<ul style="list-style-type: none"> ・「入れて」って言ったら「ヤダ」って言われたらしくて、その子が「入れてって言ったのにヤダって言われたの」って言いに来たんですよ。「なんでだったんだろうね」って(一緒に)聞きに行っただですよ。(3歳) ・3歳なので着地がわからなくなっちゃうんですけど、3人で話して仲直りして、おままごとを楽しんで… (3歳) ・最初は間に入って気持ちを聞いてあげて「好きだもんね」等、話していたけど、どうしても納得できなくて… (5歳)

<ul style="list-style-type: none"> ・まだ2歳だから、一緒に入れてって言うてもわからないから、保育者も入って、「みんなで遊ぼう」みたいな。(2歳) ・間に入ってお話しするけど、1時間ごとに「大っ嫌い」ということがしょっちゅうあって…~のように2人で遊んだらいいんじゃない？(3歳) ・保育者の関わりで、2人に変化があったかといえばなかったけど、保育者が中に入ることで遊べた感じだった。(3歳)
--

子どもどうしでの関係調整が難しい場面では、保育者自身も一緒に遊びに参加し、「共に行動」しながら、子ども同士の関係調整を図っていた。遊びの中に入り、遊びながら子どもの気持ちを聴くという援助が語られた。先行研究では、子ども同士の関係調整のための保育者の援助行為を映像録画分析から段階的に明らかにしているものもある⁸⁾が、そこでは双方への言葉かけで好転が見られない時に、保育者が「膠着状態を転換しよう」と動き出す場面がある。必要を感じた時には、直接介入しながら、関係性調整をしようと援助的な関わりをしているのである。ここでも、子どもどうしのやり取りでは事態の好転が見られないと判断すると、保育者自身が介入し、調整を図っている。まずは子どもどうしの状況を見てから、必要に応じて遊びに参加するという段階的な援助的な関わりでの視点が見られた。

3) 別の場所で切り替えるという環境設定

カテゴリー	静かにゆっくり考えられる場所を用意する。
語りの事例 (類似例)	<ul style="list-style-type: none"> ・(気持ちが)すれちがってしまった時には、別の部屋でゆっくり話す機会を持つるようにしています。(3歳) ・周りの子の声が聞こえないような…お隣のお部屋に行ったり、なかったら廊下なんかで、ゆっくりできる場所で。出てきて、戻ろうかって…遊んでいました。(3歳) ・その子だけのお部屋を、気持ちをリセットできる部屋を提供して、落ち着いたら出てきていいよということをして…自分で解決できる子だったので、それはその時間を置くことで「ごめんね」と言ったり…(5歳)

3歳以上の子どもとの関わりにおいては、落ち着いて話すことができる場所を用意するという例が複数見られた。別の場所で話すことができると、子ども同士の状況が変化していた。「別の場所」という環境により、子どもたちが落ち着いて問題に向き合うことができると子どもたちの気分も変わり、子どものどうしの関わりにおいて、事態の好転が見られた。

「自分で解決できる子だったので」という言葉もあるように、保育者が子どもの育ちを捉え、話すことで状況の変化が期待できると考えた時に他の場所へと誘導していた。

4) 保育者からのアイデア提案

カテゴリー	それぞれが楽しめるやり方の一つを提案する。
語りの事例 (類似例)	<ul style="list-style-type: none"> ・「これはこうなんじゃない」っていうと「わかった」ってなって、その場で何とかなるのが結構多くて(2~3歳) ・こっちがいろんな提案してもダメとなっちゃうんで私も悩むことがあって…1対1でないと難しい子で。(5歳) ・「じゃあこの三輪車に乗せてもらって、お砂場に連れてってあげようよ」と言ったりすると「それならいいよ」となって、乗って、そのまま砂場に出発にしますよとなって後は仲良く遊んでいて…(3歳)

3)で挙げた「直接的な介入」と重なる部分でもあるが、ここで示す事例は、保育者のアイデアが発信された内容である。折衷案となるようなアイデアが受け入れられた時に事態が好転した場合が複数あった。反対に「こっちが言うと余計に盛り上がっちゃう」という語りがあったように逆効果の場合もあったものの、保育者は、子どもたち一人一人が楽しめるようアイデアを考え、言葉かけをしていた。

子どもたちのやりたいことが別々であるにも関わらず、お互いに一緒に遊びたいという場面では、2つの遊びをうまくつなぎ合わせることで、両者が納得して遊べるよう工夫していた。保育者が柔軟性のある考え方ができることで、子ども一人一人の遊びの満足感につながっていくのではないだろうか。

(2) KH Coderによる分析

結果と考察の前半では類似例からカテゴリーを作成したが、それに併せ、テキストデータを客観的に分析するKH Coderを試みた。

1) 頻出語の抽出

抽出語出現回数を見ると「子」149回「言う」115回が圧倒的に多い。子どもが言うことに着目しながら、保育者自身も子どもに対して多く語りかけをしている保育の場面が示されている。

「女の子が他の子を嫌がって『隣同士で寝たくない』って言って」「手をつなぐのにその子とだと『嫌だ』と言って…」等、子どもが言った内容に着目している部分が多くある。

一方で「『あっち行ったら一緒に遊ぼうね』って言ったり…」「『嫌なことだったみたいだよ』って言って…」等と保育者自身の言葉も思い出しながら、エピソードが語られた。

表1 KH Coderによる抽出語上位20

抽出語	出現回数
子	149
言う	115
思う	46
遊ぶ	44
歳	34
クラス	26
一緒	24
見る	22
行く	22
自分	21
先生	21
感じ	20
聞く	20
話す	20
嫌	18
男の子	18
話	18
気持ち	17
子ども	17

2) 共起ネットワークによる分析

共起ネットワーク図を図1に示した。これは出現パターンの似通ったものを線で結び、共起関係を表している。サブグラフは、細かく11に分かれており、子どもどうしの関わりの事例には個別性があるということが考えられる。その中でも出現回数の多い01のサブグラフでは、「子」と「思う」「言う」という言葉との結びつきが示された。何かを思い、それを言葉にしている子の姿があると同時に保育者の子どもに対して語られた多くの事例についても表されているだろう。「『やだったよ』って口で言えるようになってきたから、とても落ち着いたかな」「『入れて』って言ったら、『ヤダ』って言われたらしく…」等の内容から、子どもが言う内容に着目していることがわかる。それと同時に、「『さっきまで使ってたもんね〜』って言って…」「『嫌なことだったみたいよ』ってお互いに言って…」等と、保育者自身もたくさんの言葉を子どもに語りかけている。

「思う」とのつながりについては、「もしかして屋上の遊びについていきたくないのかなって思って…」等の語りから、保育者が子どもの言動や思いにも注目していることが窺われる。

また「言う」という言葉は、「遊ぶ」という言葉とも重なり、「一緒」という言葉とつながっている。子どもが何かを言いながら遊ぶ様子が浮かび上がった。「思う」ことを誰かに「言う」ことで子ども同士の関わりが生まれ、「一緒」に「遊ぶ」ことにつながることは、すべての事例の中にも含まれる。「遊ぶ」という語は、「話」「聞く」という語ともつながっており、子どもどうしのやり取りには、話したり、聞いたりしながらのやり取りが多いことが示された。

また、「解決」「時間」「聞く」という抽出語がつながっているが、子どもどうしの解決のためには、時間をかけて関わっていることが示唆された。類似例でも挙げられた「別の場所で切り替えるという環境設定」の中でも示したように、「時間」をかけて「解決」していこうとする援助的関わりが見られた。自分で考えてこそ、子どもの学びになるという育ちに関する保育者の願いが感じられる。

02のサブグラフの中では、「先生」「園長」という語が出現し、職員同士のつながりも見られる。子どもの関わりについて、職員同士の連携も示された。

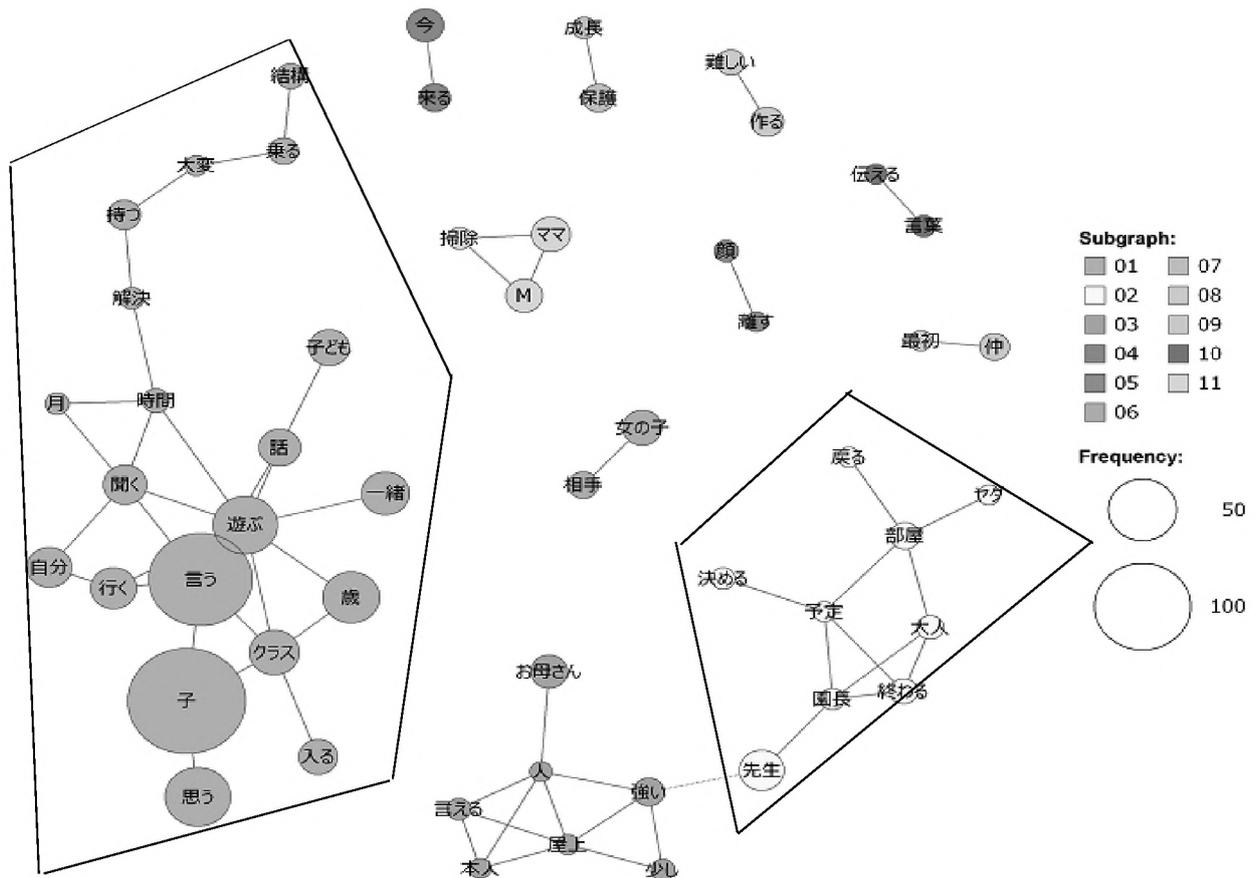


図1 KH Coderによる共起ネットワーク

3) 総合考察

①状況を言葉で伝える。

カテゴリー化のプロセスで類似例が複数見られた「代弁」を表すかのように、KH Coderの分析においても、「子」と「言う」がつながりつつ、出現数も大変多いという結果になった。保育者は、声を出し続け、子どもに向かって何かを伝えていく様子が浮かぶ。子どもへの援助的関わりを中心は、他児の気持ち等の状況を伝えようとする行為であるだろう。

②時間をかけて関わる。

カテゴリー生成の中で類似例でも、KH Coderの分析でも出てきたように、解決に向けて、場所を変えるなど「時間」をかけて関わるという内容も示された。その場の援助的な関わりだけではない日々の積み重ねが大切な保育実践が示されたところである。

③様々な角度から関わる。

その他の語りの中には、保護者や他の保育者と連

携するという関わりプロセスも語られ、その場での解決を急がずに様々な角度から関わろうとしていることについても示された。

7 おわりに

本研究の目的は、子どもどうしの関わりにおける保育者の援助的関わりの内容を捉えることであった。保育者と共に生活し、気持ちを表現していく中で、子どもは他の子どもの気持ちも感じ取りながら人と関わる力を身に付けていくのだろう。保育者の専門性を伝えていくためにも、日常的にある保育者と子どもとの援助的な関わりを引き続き可視化していきたい。

謝辞

インタビューにご協力いただきました保育者の先生方、子どもたちと関係者の方々に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 植草一世・大木みわ・木下勝世・鈴木朱美・石川明子・平野有佳子・伊藤鉄夫・時田学 (2012) 「保育者の専門性を高めるロール・プレイング活用—その意義と研修効果—」, 植草学園大学研究紀要 (4) : 27-36
- 2) 平松美由紀 (2000) 「乳幼児期の保育における保育者と子どもの関わりに関する一考察—領域「人間関係」に着目した保育者の役割を考える—」 環太平洋大学研究紀要 (17) : 37-47
- 3) 厚生労働省編 (2018) 「保育所保育指針解説」フレーベル館
- 4) 文部科学省編 (2018) 「幼稚園教育要領」フレーベル館
- 5) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館
- 6) 木下康仁 (2007) 「ライブ講義M-GTA実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」弘文堂
- 7) 星信子・秋山ゆみ子・大澤亜里 (2018) 「子どもの人間関係の育ちを支える保育者の働きかけ—保育者養成課程に在学する学生の実習中の気づきから—」札幌大谷大学・札幌大谷短期大学紀要 (48) : 81-89
- 8) 栗原ひとみ・佐々木宏之 (2016) 「保育者の寄り添う技術を可視化する～5歳児M児(女児)が仲間に入れてもらえない場面事例から～」保育の実践と研究 21 (3) : 42-52